ネガティブなイメージを持たれている外国に対する偏見を低減する写真提示の効果

沼田 潤（esi3302@mail2.doshisha.ac.jp）
井上 智義・朱 虹
〔同志社大学〕

Effects of photo-presentation to reduce prejudice toward negatively-imaged foreign countries

Jun Numata [(1)], Tomoyoshi Inoue [(2)], Hong Zhu [(1)]
[(1)] Graduate School of Social Studies, Doshisha University, Japan
[(2)] Faculty of Social Studies, Doshisha University, Japan

Abstract

The purpose of the present study was to examine how photo-presentation could influence on the images toward foreign countries. Especially, we would like to know if it can reduce the prejudice toward those countries that had been related to emotionally negative images. Specifically, it was discussed how Japanese university students' images of negatively-imaged and positively-imaged countries (the former were North Korea and Iraq, and the latter were the United States of America and Australia which were showed by preliminary test) could be modified by providing photos that gave counter impressions, and whether the change of their impressions could last or not. The participants (n = 97) were divided into two groups altogether; a group of S (42 students) that was presented positive-image photos for negatively-imaged countries and negative-image photos for positively-imaged countries, and the other group of D (55 students) that was showed both of positive-and negative-image photos of the four countries. From the results, it was indicated that S participants changed their images of the four countries; on the other hand, it was not recognized that D participants greatly changed their images. Furthermore, according to the delayed test conducted two months later, it was pointed that the modification as to North Korea and Iraq has been partially maintained in S participants. From these findings, it can be considered that photos that counter stereotypic images of foreign countries can reduce the fixed images that university students have. In addition, it was indicated that S participants with conservative thoughts modified their stereotypic images toward North Korea and Iraq more. Hence, photo-presentation is considered an effective method to reduce prejudice toward negatively-imaged countries of conservative university students.

Key words

prejudice, stereotype, intercultural education, photo-presentation, university students

1. 問題

国際化・多文化化の勢いは、ますます大きなものとなり、日本社会にさまざまな文化的背景を持つ人々が外国からやって来ている。外国から日本社会に来る者は、観光を目的とする者だけでなく、日本社会に生活の基盤を置く者も多い。したがって日本社会は、まさに多文化共生に向けて多様な取り組みを行わなければならない時代に直面していると言えよう。そして、その取り組まれるべき問題の一つとして、偏見の低減が挙げられる。

Allport（1954）によると、ステレオタイプとはカテゴリーに関連した、誇張された信念を示す。そして、カテゴリーに当てはめられる特徴は固定的であり変化しにくく、そのカテゴリーに当てはめられた集団に対する受容や拒否の正当化の装置として機能するということが指摘されている。たしかに、ある集団に対して何か特徴を当てはめることで、その集団に属する者に出会ったとき、その特徴に関する知識を用いることでコミュニケーションを円滑に行うことができるかもしれない。しかしながら、ステレオタイプは個人差を考慮しないだけでなく、他者への排除を正当化する偏見をもたらす危険性を有している。

ステレオタイプと偏見の問題を考えていく上で重要な視点として、内集団・外集団の概念が挙げられる（Allport, 1954）。内集団とは自分自身が含まれる集団であり、一方外集団とは自分が含まれない集団を指す。たとえば、日本社会において日本人を内集団としたときに、外国人は外集団に属する者となる。もちろん、人間はさまざまな集団に属しているので、状況によって強調される内集団・外集団の関係性は変化することが考えられる。そして、この内集団・外集団を考える上で重要な現象として外集団均質性効果が挙げられる（Park & Rothbart, 1982）。この現象は、外集団のばらつきを内集団のばらつきよりも小さく捉える傾向が生じるということを意味する。つまり、自分が属さない外集団の多様性は軽視・無視され、均質なものとして把握されるということである。さらに、よく知らない他者に対して抱かれる不安感によって、その他者とのコミュニケーションが回避され、ステレオタ

イプ的理解が強調されるということが指摘されている（Bodenhausen, 1993; Duronto, Nishida, & Nakayama, 2005）。つまり、外集団に属する他者に対する、「よく知らない」という不確実性によってもたらされる不安感がその他者との接触やコミュニケーションの回避という行動を引き起こすことで、その他者に対する深い理解はなされず、ステレオタイプという固定化された情報が頼られることのなるというのである。

外集団均質性効果や不安感に加えて、ステレオタイプと偏見の問題を考えていく上で重要な概念として、社会的アイデンティティが挙げられる。社会的アイデンティティとは、自分がある集団に属しているという信念を指す（Tajfel, Billing, Bundy, & Flament, 1971; 上瀬，2002; 浦，2009）。そして、人間は自らを価値あるものと認めたいという自己高揚動機を持っていると考えられることから、肯定的な社会的アイデンティティを保とうとする傾向、自分が属している集団を価値が高いものと捉える傾向があることが指摘されている。それでは、いかに自分が属している集団の価値を高めるのかというと、外集団より内集団の方が優位であることを確認することで自己評価を高めるのである。そして、内集団が優位であると確認することを、内集団バイアスと言う（上瀬，2002）。このようにして、内集団には優位な価値付けがなされ、一方外集団に属する他者に対しては劣位な価値付けがなされることで、その他者に対する排除を正当化する偏見がもたらされると考えられるのである。

偏見を低減する方法に関するさまざまな試みがなされている。曺（2005）は、日本と韓国の小学生がチャットを通じた接触によって、チャット相手の個性を理解し、外国に対するカテゴリーを使いにくくなり、外国人に対する態度が好転されることを明らかにしている。また、佐々木（2003）は、ある私立高等学校の英語及び国際事情のクラスにおける白人と黒人間の人種差別問題の学習において、高校生の偏見低減過程における感情の役割に関して検証を行った。その結果､他者の立場へ視点を移し、その他者の立場に立つことでもたらされた感情をよりどころにした内的検証を行う生徒には、自己関与の伴う理解が促され、偏見が低減されることが示された。以上で指摘されていることは、偏見を持つ他者に対する心理的距離を小さくすることで偏見が低減され、その他者に対する態度が好転されるということであり、今後の偏見低減の教育方法を考案する上で、貴重な示唆をもたらすものであると考えられる。しかしながら、これらの取り組みは特別な学習機会が用意されている授業であり、一般の授業の中で取り入れていくには困難であることは明白である。限られた生徒に対してではなく、できるだけ多くの生徒に対して偏見低減の機会を提供することが重要であり、より容易で効果的な教育方法を考案する必要があると言えよう。

以上で述べたものは、初等・中等教育における取り組みであったが、大学で行われている偏見低減の取り組みとしては、先ず倉地（1992，1998，2002）が提唱する異文化を持つ他者との直接的コミュニケーションによる偏見低減教育が挙げられる。倉地は、学生一人ひとりに違和感を持つような異文化を持つ他者を挙げさせ、その異文化を持つ他者と向き合う機会を持たせる教育活動を行っている。その他者とのコミュニケーションを通して、今まで気付くことができなかったさまざまな面を認識させ、さらにその他者の個性を理解させることで、偏見の低減を目指しているのである。倉地が学生一人ひとりにステレオタイプ的に捉えてしまう異文化を持つ他者と直接的なコミュニケーションを持たせることで、個性の理解の促進、偏見の低減がもたらされていることを指摘していることから、異文化を持つ他者との直接的コミュニケーションを持たせることは大学における異文化理解教育の方法として重要であると言えよう。しかしながら、倉地の実践は少人数で行われていて、また異文化を持つ他者と向き合おうとしない学生に対しては、その教育を受ける機会が提供されない。したがって、限られた学生に対してのみその機会が開かれていて、多くの学生に対して偏見低減の機会が提供されているとは言えない。

その一方で、多くの学生に対する偏見低減の教育方法に関する研究も存在する。例えば､小平･伊藤･松上（2007）や小平・伊藤（2009）は、大学生を対象にビデオ視聴による統合失調症を持つ人への偏見低減の教育効果を検討している。統合失調症の当事者の日常生活や病の体験の語りのビデオ視聴は、統合失調症を持つ人に対する社会的距離を縮小し、否定的イメージを改善するということが指摘されている。この調査研究では、統合失調症を持つ人に対する社会的距離の縮小や否定的イメージの改善がビデオ視聴後どれだけ持続されるのか明らかにされていないという限界があるものの、ビデオ視聴が多くの学生に偏見低減の機会を提供するものであることを示唆していると言えよう。また、ビデオ視聴に加えて、写真提示による外国のイメージ変容の効果を検証する研究もある。福村・市谷・伊藤（未発表）は、日本人になじみが深い国（アメリカ・オーストラリア）とそうでない国（イスラエル・中国）において、それぞれの国のイメージが写真提示によっていかに変化するか検証している。検証の結果、アメリカとイスラエル、中国に関してはイメージ変化が大きく、オーストラリアに関しては、他の 3 国に比べてイメージ変化は大きくないが、ある程度変化するということが指摘されている。この調査研究は、写真を提示することで、外国に対するイメージが変化することが述べられていて、固定的に理解されやすい外国に対する偏見低減の容易で効果的な教育方法として写真提示が考えられることが示唆されている。しかし、この写真提示の調査研究においても、写真提示後どれだけイメージ変化が持続されるのか明らかにされてはいない。また、この調査研究では、国の選定基準が日本人にとってなじみ深いかそうでないかというものであり、どのようなイメージを持たれているのかに関しては選定基準として挙げられていない。外国に対するステレオタイプ的理解には肯定的・否定的なイメージが伴っていると考えられ、

そのイメージの質を考慮しながら写真提示を行うことが、外国に対する偏見低減の教育方法を考えていく上で重要であると言えよう。

そこで、本研究は、写真提示という方法に焦点を当てて、容易で効果的な偏見低減の教育方法を検討することを目的とする。肯定的・否定的イメージを持たれる外国が写真提示によって、それらの国のイメージがどのように変化するかを明らかにしていくが、特に否定的イメージを持たれる国に対する写真提示の効果を検証していきたい。なぜなら、否定的イメージは差別や排除の正当化に結びつくものであり、否定的イメージを伴った外国の偏見低減の試みは多文化共生を目指す異文化理解教育にとって極めて重要であると考えられるからである。さらに、大高・伊藤（2009）が、コミュニティ内におけるメンバー間のつながりの強さであるコミュニティ感覚と精神障害者に対する偏見との関連の検討において、コミュニティ感覚が強いほど精神障害者に対する偏見が少ないことを指摘していることから、個人差と偏見との関連を検討することも異文化理解教育の方法を考えていく上で重要であると言えよう。そこで、写真提示の効果に関する検討に加えて、異文化理解尺度を用いて実験参加者の異文化理解の個人差を明らかにし、その個人差と写真提示による外国に対するイメージの変化との関連を検証し、偏見低減の教育方法に関する示唆を得ることを第二の目的とする。

2. 予備調査

日本人大学生を対象に本調査で取り上げる肯定的なイメージを持たれる国と否定的なイメージを持たれる国を選定するための予備調査を以下の 2 段階に分けて実施した。

2.1 肯定的・否定的イメージを持たれる国に関する質問紙調査

学部生・大学院生（女性 21 名、男性 4 名）を対象に、肯定的・否定的なイメージを持たれる国をそれぞれ 5 ヶ国挙げることが求められた。各国が挙げられた頻度を集計して、肯定的・否定的なイメージを持たれる国それぞれ上位 3 ヶ国が選ばれた。肯定的なイメージを持たれる国としてフランス、アメリカ、オーストラリアが選ばれ、否定的なイメージを持たれる国として北朝鮮、中国、イラクが選ばれた。

2.2 SD 法を使用した国のイメージに関する質問紙調査

以上に挙げた 6 ヶ国のイメージを調べるため、15 の形容詞対から構成され、6 段階評定法の形式で作成した質問紙を用いて、大学生（女性 44 名、男性 20 名）に対して各国に対するイメージを評定することが求められた。14 の形容詞対は、井上・小林（1985）で示されている 49 の形容詞対から、「明るいー暗い」「安定したー不安定な」「弱いー強い」「責任感のあるー無責任な」「やさしいーきびしい」「嫌いなー好きな」「清潔なー不潔な」「幸福なー不幸な」「だらしのないーきちんとした」「美しいーみにくい」「わがままなー思いやりのある」「良いー悪い」「親しみやすいー親しみにくい」「自由なー不自由な」という形容詞対が選定された。さらに、国を形容する場合にふさわしい表現である「閉鎖的なー開放的な」という形容詞対が加えられた。SD 法の評定結果から特徴が明確でないフランスと中国が除外され、最終的に肯定的なイメージを持たれる国としてアメリカとオーストラリアが、否定的なイメージを持たれる国として北朝鮮とイラクが選ばれ、以上の 4 ヶ国が本調査で取り上げられる国と決定された。

3. 方法

3.1 実験参加者

予備調査に参加しなかった D 大学の日本人学部学生 105 名（2 ヶ月後のセッションにも参加した学生は 97 名）。大学生は以下の 2 条件のいずれかの課題が課せられた：① S 条件（肯定的なイメージを持たれる国に対しては、否定的な印象を与える写真のみを、否定的なイメージを持たれる国に対しては肯定的な印象を与える写真のみを提示する）群：44 名（2 ヶ月後のセッションにも参加した学生は 42 名）；② D 条件（以上に挙げた 4 カ国に対して肯定的･否定的両方の印象を与える写真を提示する）群: 61 名（2 ヶ月後のセッションにも参加した学生は 55 名）。

3.2 実験材料

① 異文化理解に関する質問紙：沼田（2010）の研究結果から明らかになった異文化理解に関する 5 つの因子（多様な価値観、少数派への無関心、保守的思想、ステレオタイプ的理解、自己中心性）を構成する 37 項目に対して、6 段階評定法の形式で作成した質問紙。

② 国のイメージに関する質問紙：国のイメージを調べるための 15 の形容詞対から構成され、6 段階評定法の形式で作成した質問紙。予備調査で使用した質問紙と同様のものである。

③ 外国の写真：アメリカ、オーストラリア、北朝鮮、イラクの 4 ヶ国の肯定的な印象を与えると考えられる写真各 4 枚と、否定的な印象を与えると考えられる写真各 4 枚。肯定的な印象を与えると考えられる写真は、「子どもの笑顔」「複数の人間のいる平和な様子」「美しい自然」「文化的価値のある建造物」をテーマに扱ったものであり、一方否定的な印象を与えると考えられる写真は、「民族や国家の対立」「身体の危機」「生命の危機と孤独」「生活不安と貧困」をテーマに扱ったものである。

3.3 手続き

2009 年 11 月中旬に、教育学系の 4 つの講義の中で実施された。先ず異文化理解に関する質問紙が受講生に配布され、それぞれの質問に回答することが求められた（所要時間約 5 分）。つぎに、国のイメージに関する質問紙が配布され、各国に対するイメージを評定することが求められた（所要時間約 5 分）。そして、外国の写真は各自のパソコンで、パワーポイントにより 1 枚 5 秒の間隔で自

動的に提示されるようにした。S 条件においては、アメリカとオーストラリアに対しては否定的な印象を与えると考えられる写真 4 枚が、北朝鮮とイラクに対しては肯定的な印象を与えると考えられる写真 4 枚が提示された。一方、D 条件においては、以上の 4 ヶ国に対して肯定的な写真、否定的な写真のそれぞれ 4 枚が提示された。最後に再度、国のイメージに関する質問紙が配布され、4 ヶ国のイメージを評価することが求められた（所要時間約 5 分）。さらに、2010 年 1 月中旬にそれぞれの国に対するイメージを同様の手続きで調査した。

4. 結果と考察

4.1 4 ヶ国のイメージの変容について

本研究の大きな目的の一つは、特定の外国の写真を提示することにより、それらの国のイメージがどのように変化するかを明らかにすることであった。そのため、本調査で用いた国のイメージに関する質問紙の 15 対の SD 尺度のそれぞれについて、ネガティブな（否定的なイメージを表現する）形容詞が高得点となるような数値を与えて、それぞれの国ごとに、また、3 回の測定時期ごとに、ネガティブイメージ得点を算出した。それらの結果を本実験の 2 条件別にグラフで示したものが、Figure 1 と Figure 2 である。すなわち、Figure 1 は、それぞれの国に対して、予備調査で示されたイメージと逆のイメージを与える写真 4 枚のみを提示した S 条件の結果を示しているのに対して、Figure 2 では、ポジティブな写真とネガティブな写真の合計 8 枚の写真を、それぞれの国に対して提示した D 条件の結果を示している。

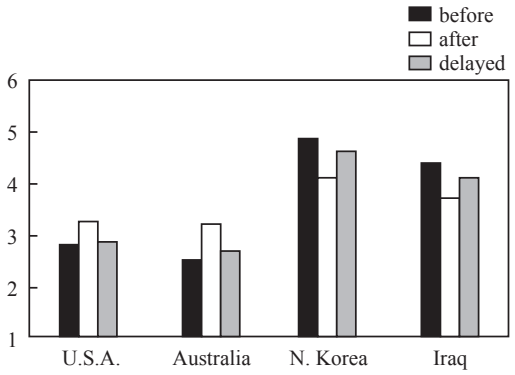

Figure 1: Image modification results of the four countries in Group S

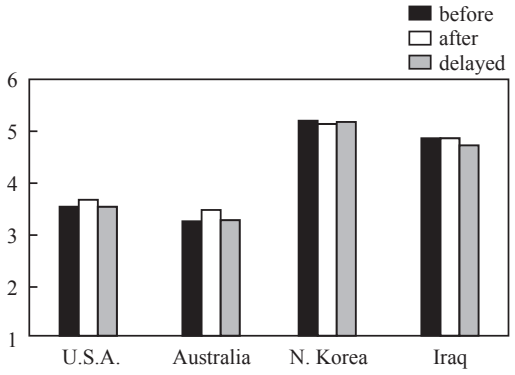

Figure 2: Image modification results of the four countries in Group D

2 つの図を比較すると明らかなように、D 条件では、3 つの測定時期のよって大きな違いが認められないのに対して、S 条件においては、それぞれの国によって結果は異なるものの、3 回の測定時期において顕著な変化が認められた。このことは、予備調査で示されたイメージと逆のイメージを与える写真を提示した群においてのみ、実験参加者がそれまでに有していたそれぞれの国のイメージが、有意に変化したことを示している。そこで、これ以降は、S 条件についてのみ、より詳細な統計的分析を行った結果を示すことにする。

最初に、S 条件の北朝鮮に対する形容詞 15 対評定値の写真提示時期ごとの変化を見ると、提示前から提示後の形容詞 15 対評定値の変化は有意であり（$t = 7.607$, $p < .001$）、提示前から事後の形容詞 15 対評定値の変化も有意であった（$t = 2.564$, $p < .05$）。一方で提示後から事後の形容詞 15 対評定値の変化にも有意な差が認められている（$t = 5.043$, $p < .001$）。すなわち、北朝鮮に関しては、実験参加者が有するネガティブなこの国のイメージは、4 枚の写真提示によって，その直後にポジティブな方向に変化し、2 ヶ月後の追跡調査においては, その変化したイメージは、写真提示前のイメージに多少は引き戻される結果となったものの、4 枚の写真提示によって，2 か月というかなりの時間的な経過後でも、国のイメージがよくなることが示された。

つぎに、S 条件のイラクに対する形容詞 15 対評定値の写真提示時期ごとの変化を見ると、提示前から提示後の形容詞 15 対評定値の変化は有意であり（$t = 5.779$, $p < .001$）、提示前から事後の形容詞 15 対評定値の変化も有意であった（$t = 2.552$, $p < .05$）。一方で提示後から事後の形容詞 15 対評定値の変化にも有意な差が認められている（$t = 3.227$, $p < .01$）。このことは、イラクに対するネガティブなイメージは、北朝鮮に対するイメージの変容と同様に、4 枚の写真提示後、いったんは比較的ポジティブなものへと変化した後、2 か月後の事後調査において、そのイメージは、やはり、個人が有するもともとのネガティブなイメージに引き戻されるものの、写真提示前よりは結果として、国のイメージがよくなることが示された。

本研究の主たる目的の一つは、ネガティブなイメージを持たれている国が、数少ない写真提示によって、個人のなかで、そのイメージがどのように変化するのかを調べることであった。予備調査において、特にネガティブなイメージを持たれる国として抽出された北朝鮮とイラクのいずれの国においても、このような同様の結果が得られたことは、このような写真提示によって、外国に対する偏見を低減できる可能性があることを示したものと考えることができる。もっとも、2 ヶ月後には、その偏見低減の効果は薄れてしまうことも、本実験結果は示して

いるものと言え、国のイメージを根本的変えるには、数枚の写真提示だけでは不十分であることが示されたという解釈も可能である。

つぎに、予備調査でポジティブなイメージを持たれる国として抽出されたアメリカに対する形容詞 15 対評定値の写真提示時期ごとの変化を見てみる。これまでと同様に S 条件の結果を分析してみると、提示前から提示後の形容詞 15 対評定値の変化は有意であった（$t = 4.393$, $p < .01$）。また提示後から事後の形容詞 15 対評定値の変化も有意であった（$t = 3.792$, $p < .01$）。一方、提示前と事後の形容詞 15 対評定値の変化には有意な差が見られなかった（$t = 0.601$, n.s.）。つまり、写真提示直後には、そのイメージがいったんは変化するものの、2 ヶ月後の事後調査においては、写真提示前と大きく変わらないことが示された。

最後に、S 条件のオーストラリアに対する形容詞 15 対評定値の写真提示時期ごとの変化を見てみると、提示前から提示後の形容詞 15 対評定値の変化は有意であり（$t = 6.455$, $p < .01$）、提示後から事後の形容詞 15 対評定値の変化も有意であった（$t = 4.774$, $p < .01$）。一方、提示前と事後の形容詞 15 対評定値の変化には有意な差が見られなかった（$t = 1.681$, *n.s.*）。このことは、前述のアメリカの結果と基本的には同じことを示している。

実験結果として得られた 4 ヶ国について、写真提示によるイメージの変容についてまとめてみると、ネガティブなイメージを持たれている北朝鮮とイラクの 2 ヶ国については、写真提示によって、国のイメージはポジティブな方向に変化し、2 ヶ月後の追跡調査においても，その効果が少なくとも部分的には維持された。それに対して、ポジティブなイメージを持たれているアメリカとオーストラリアについては、写真提示によって、一時的にその国のイメージは、悪くなるものの、2 ヶ月後には、そのような結果は確認できないことが示された。

ネガティブなイメージを持たれる国と、ポジティブなイメージを持たれる国で、異なった結果が出たことは、それ自体興味深いことである。そもそも、対人認知などの領域においては、出会う頻度が多いほど、その相手に対する好感度が向上するという、単純接触効果（mere exposure effect）というような現象が報告されている（Zajonc, 1968）。予備調査の結果から示された国の好感度についても、同様のことは当てはまると思われる。たとえば、アメリカは地理的には、日本からかなりの距離があるにもかかわらず、日本国内で報道される内容は他の国と比べても非常に多い。また、オーストラリアは多くの日本人が観光や留学を目的に行く国の一つであり、オーストラリアの情報は容易に手に入れることができると言えよう。逆に、北朝鮮は、日本にとっては隣国であるのにもかかわらず、正式な国交をもたない特殊な国である。そのため、当然ながら国内における報道内容は、一部の偏ったもののみに制約されている。それに対して、北朝鮮と国交を持つ同じ隣国の中国などでは、北朝鮮の情報は、少なくとも日本で得られるものより多様なものがあり、結果として好感をもって迎え入れられるような情報も少なくない。事実、今回実験で採用した北朝鮮に関するポジティブなイメージを与えると思われる写真は、インターネット上の中国のサイトから引用したものであり、その現実の一面を示している。さらに、イラクという国に関する情報は戦争に関連したものが多く、日本国内における報道も偏ったものであると考えられよう。したがって、多くの日本人がイラクに対して偏った見方を持っているということは否定できないであろう。

本研究結果から、もともと情報の少ないネガティブなイメージの国に関しては、偏った情報による否定的ステレオタイプが形成されていたと考えられ、提示された数枚の写真がそれなりの重みを持ったと言えよう。つまり、提示した写真がネガティブなイメージの国の不足している情報を与えたと考えられ、それゆえ偏った否定的イメージが改善されたと考えられるのではないであろうか。逆に、もともと比較的情報が多いポジティブな国に関しては、多様な情報によってそこまで強いステレオタイプが形成されていないことが考えられ、数枚の写真では、イメージを大きく変える結果にならなかったと解釈できるのが妥当だと思われる。

4.2 北朝鮮とイラクに関するイメージ変容の結果について

上述のとおり、本実験の結果からは、ネガティブなイメージを持たれている 2 国に対してのみ、追跡調査の事後テストにおいても、写真提示後のイメージ変容が保持された。そこで、北朝鮮とイラクに関する SD 法でのイメージの変化を、それぞれより詳細に見ていくことにする。Figure 3 は、SD 尺度として使用された 15 対それぞれの形容詞対の上で、写真提示前と、提示後、そして、2 ヶ

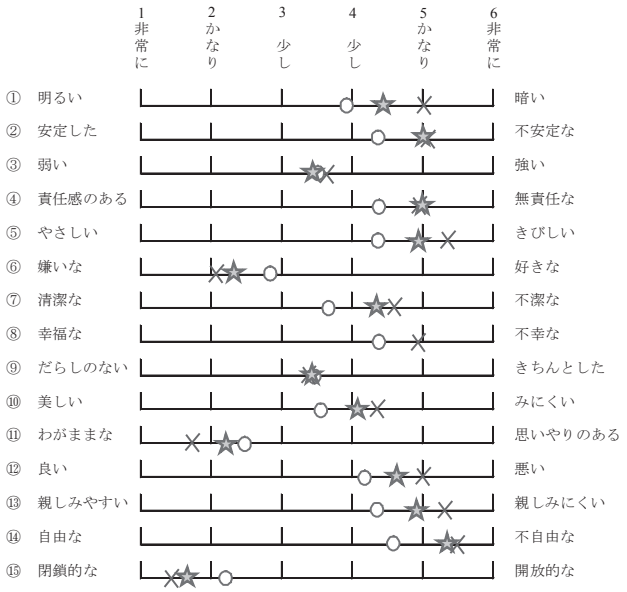

Figure 3: Image modification results toward North Korea by SD method for Group S

Note: Most of the average evaluation scores toward North Korea modified from before (×) the photo-presentation to after (○) it. The modified images have partially persisted at least for 2 months (☆).

Table 1: Results of multiple comparisons on evaluation scores toward North Korea among 3 evaluation times in Group S

Adjectives	Before	After	Delayed	Before・After※1	Before・Delayed※2	Aftert・Delayed※3
「明るいー暗い」	5.024	3.905	4.405	***	***	**
「安定したー不安定な」	5.071	4.333	5.048	***	n.s.	***
「弱いー強い」	3.381	3.464	3.595	n.s.	n.s.	n.s.
「責任感のあるー無責任な」	5.000	4.381	5.000	***	n.s.	***
「やさしいーきびしい」	5.381	4.324	4.929	***	*	***
「嫌いなー好きな」	5.048	4.176	4.690	***	*	**
「清潔なー不潔な」	4.571	3.643	4.286	***	n.s.	***
「幸福なー不幸な」	4.905	4.245	4.619	***	n.s.	*
「だらしのないーきちんとした」	3.586	3.464	3.571	n.s.	n.s.	n.s.
「美しいーみにくい」	4.429	3.586	4.119	***	+	**
「わがままなー思いやりのある」	5.262	4.524	4.786	***	**	n.s.
「良いー悪い」	5.071	4.171	4.690	***	*	**
「親しみやすいー親しみにくい」	5.357	4.357	4.929	***	*	**
「自由なー不自由な」	5.500	4.524	5.357	***	n.s.	***
「閉鎖的なー開放的な」	5.595	4.738	5.333	***	n.s.	***

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
※1　T-tests on the differences of the evaluation scores between Before and After
※2　T-tests on the differences of the evaluation scores between Before and Delayed
※3　T-tests on the differences of the evaluation scores between After and Delayed

月後の事後テストにおけるそれぞれの平均評定値を示したものである。この Figure 3 に示すとおり、予備調査において、最もイメージがよくなかった北朝鮮の国のイメージは、SD 尺度として使用された 15 対のほとんどの形容詞対の尺度において、写真の提示前と提示後の比較において、ネガティブなものからポジティブなものへと変化している。そして、そのポジティブなものへ変化した北朝鮮のイメージは、2 ヶ月後の追跡調査において、写真提示前のイメージに多少引き戻されたが、写真提示前と比べて北朝鮮のイメージがよくなることが示されている。

そこで、提示前、提示後、事後それぞれの写真提示時期の間で評定値に差が見られるかどうか検討するために多重比較を行った。その結果を Table 1 に示す。Table 1 が示すように、提示前後の比較において、「弱いー強い」「だらしのないーきちんとした」という 2 つの形容詞対以外の 13 形容詞対でイメージの改善が見られた。さらに、提示前と事後の比較において、「明るいー暗い」「やさしいーきびしい」「嫌いなー好きな」「美しいーみにくい」「わがままなー思いやりのある」「良いー悪い」「親しみやすいー親しみにくい」という 7 つの形容詞対に関しては、提示前よりもイメージの改善が認められた。確かに、北朝鮮のイメージが 2 ヶ月後には提示前のイメージに多少引き戻されているが、しかしそれでも写真 4 枚で北朝鮮に対するイメージの改善がもたらされたと考えられる。

また、Figure 4 に示すとおり、イラクのイメージは、SD 尺度として使用された 15 のほとんどの形容詞対の尺度において、北朝鮮と同様に、写真の提示前と提示後の比較において、ネガティブなものからポジティブなものへと変化している。そして、そのポジティブなものへ変化したイラクのイメージは、2 ヶ月後の追跡調査において、写真提示前のイメージに多少引き戻されたが、写真提示前と比べてイラクのイメージがよくなることが示されている。

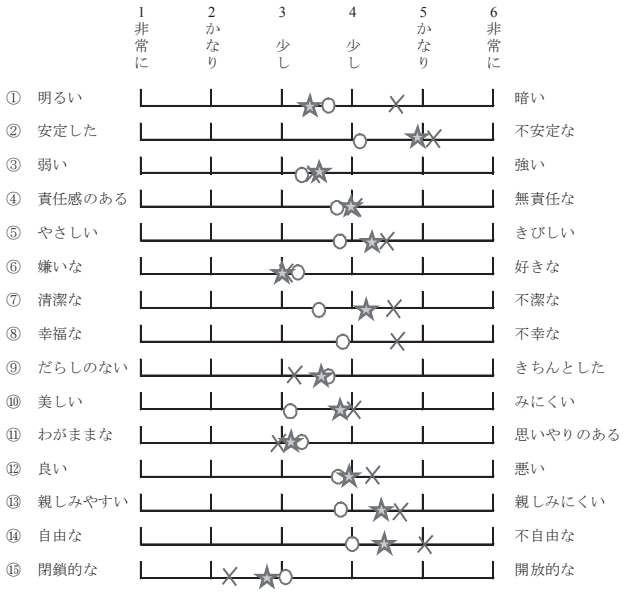

Figure 4: Image modification toward Iraq by SD method in Group S

Note: Most of the average evaluation scores toward Iraq modified from before (×) the photo-presentation to after (○) it. The modified images have partially persisted at least for 2 months (☆).

さらに、提示前、提示後、事後それぞれの写真提示時期の間における評定値の差に関する多重比較の結果であ

Table 2: Results of multiple comparisons on evaluation scores toward Iraq among 3 evaluation times in Group S

Adjectives	Before	After	Delayed	Before・After※1	Before・Delayed※2	After・Delayed※3
「明るいー暗い」	4.714	3.571	4.333	***	*	***
「安定したー不安定な」	5.286	4.095	4.929	***	+	***
「弱いー強い」	3.607	3.595	3.429	n.s.	n.s.	n.s.
「責任感のあるー無責任な」	4.119	3.857	4.000	n.s.	n.s.	n.s.
「やさしいーきびしい」	4.429	3.833	4.262	**	n.s.	*
「嫌いなー好きな」	3.871	3.710	3.976	n.s.	n.s.	n.s.
「清潔なー不潔な」	4.667	3.595	4.190	***	**	**
「幸福なー不幸な」	4.762	3.810	4.452	***	+	***
「だらしのないーきちんとした」	3.852	3.293	3.405	**	*	n.s.
「美しいーみにくい」	4.024	3.098	3.833	***	n.s.	***
「わがままなー思いやりのある」	4.121	3.660	3.833	*	n.s.	n.s.
「良いー悪い」	4.367	3.779	3.952	**	*	n.s.
「親しみやすいー親しみにくい」	4.762	3.905	4.405	***	+	**
「自由なー不自由な」	5.121	4.024	4.452	***	***	*
「閉鎖的なー開放的な」	4.586	4.000	4.214	**	*	n.s.

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$
※1 T-tests on the differences of the evaluation scores between Before and After
※2 T-tests on the differences of the evaluation scores between Before and Delayed
※3 T-tests on the differences of the evaluation scores between After and Delayed

る Table 2 が示すように、提示前後の比較において、「弱いー強い」「責任感のあるー無責任な」「嫌いなー好きな」という 3 つの形容詞対以外の 12 形容詞対でイメージの改善が見られた。さらに、提示前と事後の比較において、「明るいー暗い」「安定したー不安定な」「清潔なー不潔な」「幸福なー不幸な」「だらしのないーきちんとした」「良いー悪い」「親しみやすいー親しみにくい」「自由なー不自由な」「閉鎖的なー開放的な」という 9 つの形容詞対に関しては、提示前よりもイメージの改善が認められた。北朝鮮の場合と同様に、イラクのイメージが 2 ヶ月後には提示前のイメージに多少引き戻されているが、写真 4 枚でイラクに対するイメージの改善がもたらされたと考えられる。

したがって、以上の結果から写真提示がネガティブなイメージを持たれる外国に対する偏見の低減に有効であるということが示唆されたと言えよう。また、北朝鮮とイラクのイメージ変容に質的相違が認められるが、やはりそれぞれの国に対するネガティブなイメージに質的な差があるからだと考えられる。北朝鮮に関しては、日本という国に対して脅威となる存在として報道されることが多い一方で、イラクに関しては独裁や戦争によって多くの市民が犠牲となっているということが強調され報道されていると考えられる。したがって、それぞれの国に対して持たれるネガティブなイメージが異なってくることが伺え、写真提示によるイメージの変化にも影響が及ぼされていると考えられる。例えば、「嫌いなー好きな」形容詞対で、北朝鮮に関して見ると、写真提示によってよりポジティブなものになっている一方で、イラクに関しては写真提示によって大きな変化はもたらされていない。この点からも、日本との政治的・社会的・経済的関係を考慮しながら、写真を選定していくことが重要であると考えられる。

4.3 実験参加者ごとの評定値の変化に関する結果

ここまでの結果はイメージの平均評定値をもとにした議論であった。しかしながら、当然それらの結果は実験参加者一人ひとりについては、異なる数値を示している。偏見低減の問題を扱うからには、本来、偏見を持つ傾向が強い個人と、そのような偏見の程度がそれほど強くない個人がいることが予想される。

そこで、S 条件の北朝鮮において、写真が提示される前後の北朝鮮に対する 15 の形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解に関する質問紙によって示された異文化理解の 5 要因の一人ひとりの得点との相関を求めた。その結果、S 条件における、北朝鮮の肯定的な印象を与える写真を提示する前後の北朝鮮に対する 15 の形容詞対の印象評定値の変化値と、異文化理解の要因である「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（$r = .312$）。一方、写真提示前と事後の北朝鮮に対する 15 の形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解の 5 要因の一人ひとりの得点との相関を求めたところ、15 形容詞対の印象評定値の変化値と、異文化理解の 5 要因得点との間に相関は認められなかった。

さらに、S 条件の写真提示前後における北朝鮮に対する 15 の形容詞対一つひとつの印象評定値の変化値と、「保守的思想」要因得点との相関を求めた。その結果、「明るいー暗い」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r

= .294）。また、「やさしいーきびしい」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（r = .382）。そして、「嫌いなー好きな」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（r = .353）。さらに、「清潔なー不潔な」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .287）。加えて、「美しいーみにくい」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に比較的強い相関が認められた（r = .423）。そして、「良いー悪い」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（r = .368）。さらにまた、「親しみやすいー親しみにくい」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .257）。最後に、「閉鎖的なー開放的な」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .290）。

以上にS条件の写真提示前後における北朝鮮に対する8つの形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との相関を示したが、さらに加えて、それら8つの形容詞対の提示前における評定値が「保守的思想」要因得点の上位群と下位群で差があるかどうか確認するために、それぞれの群における8つの形容詞対の提示前における評定値に対してt検定を行った。なお、「保守的思想」要因得点の平均値に標準偏差の二分の一を足した値以上の者を上位群、その平均値から標準偏差の二分の一を減じた値以下の者を下位群とした。t検定の結果、提示前における「明るいー暗い」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で差が見られる傾向が認められた（t = 1.931, df = 23, .10 < p <.05）。そして、提示前における「やさしいーきびしい」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で有意な差が認められた（t = 4.047, df = 14.743, p < .01）。また、提示前における「美しいーみにくい」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で差が見られる傾向が認められた（t = 1.922, df = 23, .10 < p < .05）。さらに、提示前における「良いー悪い」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で有意な差が認められた（t = 4.186, df = 23, p < .01）。加えて、提示前における「親しみやすいー親しみにくい」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で差が見られる傾向が認められた（t = 1.854, df = 23, .10 < p < .05）。最後に、提示前における「閉鎖的なー開放的な」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で有意な差が認められた（t = 2.689, df = 12.773, p < .05）。

さらに、S条件のイラクにおいて、写真が提示される前後のイラクに対する15の形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解の5要因の一人ひとりの得点との相関を求めた。その結果、15形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解の5要因得点との間に相関は認められなかった。一方、写真提示前と事後のイラクに対する15の形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解の5要因の一人ひとりの得点との相関を求めたところ、15形容詞対全体の印象評定値の一人ひとりの変化値と、異文化理解の要因である「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .296）。

そこで、S条件の写真提示前と事後のイラクに対する15の形容詞対一つひとつの印象評定値の変化値と、「保守的思想」要因得点との相関を求めた。その結果、「責任感のあるー無責任な」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（r = .398）。また、「嫌いなー好きな」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .266）。加えて、「幸福なー不幸な」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .312）。さらに、「良いー悪い」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が認められた（r = .351）。さらにまた、「親しみやすいー親しみにくい」形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との間に低い相関が見られる傾向が認められた（r = .314）。

以上にS条件の写真提示前と事後のイラクに対する5つの形容詞対の評定値の変化値と「保守的思想」要因得点との相関を示したが、北朝鮮の場合と同じように、それら5つの形容詞対の提示前における評定値が「保守的思想」要因得点の上位群と下位群で差があるかどうか確認するために、それぞれの群における5つの形容詞対の提示前における評定値に対してt検定を行った。その結果、提示前における「良いー悪い」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で有意な差が認められた（t = -3.173, df = 20, p < .001）。また、提示前における「親しみやすいー親しみにくい」形容詞対の評定値は、上位群と下位群との間で有意な差が認められた（t = -2.372, df = 20, p < .05）。

北朝鮮に関しては、保守的な考えを持つ人ほど写真提示前後において北朝鮮に対するイメージが改善することが示された。特に、「やさしいーきびしい」「良いー悪い」「閉鎖的なー開放的な」という3つの形容詞対において、写真提示前で「保守的思想」要因得点の上位群・下位群で、有意な差があり、また「明るいー暗い」「美しいーみにくい」「親しみやすいー親しみにくい」という3つの形容詞対において、写真提示前で「保守的思想」要因得点の上位群・下位群で差が見られる傾向が認められたことから、保守的思想が強い人に対する北朝鮮のポジティブな印象を与える写真提示は偏見の低減をもたらす上で効果があると考えられよう。さらに、イラクに関しては写真提示前と事後において保守的な考えを持つ人ほどイラクに対するイメージが改善される傾向が認められた。特に、「良いー悪い」「親しみやすいー親しみにくい」という2つの形容詞対において、写真提示前で「保守的思想」要因得点の上位群・下位群で有意な差があり、保守的思想が強い人に対するイラクのポジティブな印象を与える写真提示も偏見低減を目指す上で意義のあることだと言えよう。

そして、今回の結果から、北朝鮮とイラクにおいて、

保守的思想を持つ人の両国に対するイメージの改善がよりもたらされる時期に違いが見られた。北朝鮮という国は日本にとって脅威をもたらす存在として捉えられていると考えられるため、保守的思想を持つ人にとって北朝鮮はただ危険な存在として否定的なステレオタイプを持たれていると考えられよう。そして、北朝鮮の多様な側面を示す写真提示が大きなインパクトを与え、日本にとって脅威とはならないという認知を生じさせたため、特に写真提示前後において北朝鮮に対するイメージの改善がもたらされたと考えられる。一方、イラクは日本にとって北朝鮮ほど脅威となる存在として捉えられていないと考えられるので、写真提示前後においては保守的な考えを強く持つ人に写真提示が大きなインパクトをもたらさなかったと言えよう。しかし、2ヶ月後においては、保守的思想を持つ人ほどイラクのイメージの改善が見られる傾向が認められたことから、日本に脅威とは捉えられていないと考えられる国に対しては、保守的思想を持つ人における写真提示の効果が時間がある程度経過してから現れる可能性があるということが考えられよう。

5. 総合考察

本研究は、特定の外国の写真を提示することによって、それらの国のイメージがどのように変化するかを検証することを目的としていた。予備調査の結果、ネガティブなイメージを持たれている国として選定された北朝鮮とイラク、および、ポジティブなイメージを持たれている国として選定されたアメリカ、オーストラリアの計4ヶ国の複数の写真提示を行った。その結果、それぞれの国に対して予備調査で示されたイメージとは、逆のイメージを与える写真4枚のみを提示したS条件において、3回の測定時期において顕著な変化が認められた。特に、ネガティブなイメージを持たれる北朝鮮とイラクに関しては、写真提示の2ヶ月後に実施した事後調査において、もともとのネガティブなイメージにある程度引き戻されるものの、写真提示前よりイメージがよくなることが明らかになった。したがって、ネガティブなイメージを持たれる国の偏見を低減するために写真提示が有効であるという可能性が示唆された。さまざまな偏見低減の教育方法が研究されているが、写真提示はその中でも比較的短時間のうちに容易に行うことができ、多様な場面で活用されることが期待される。しかし、どのような写真が偏見低減により一層効果があるのかを検証する必要があると思われる。本研究では、写真の選定基準を設定したが、日本との関係性を考慮した上で、どの基準で選定された写真が特に偏見低減に有効であるのかを検証することが今後の課題であると考えられる。

さらに本実験結果から、ネガティブなイメージを持たれる国に対する偏見低減を目指す上で、写真提示が保守的な考えを持つ人に対してより有効であることが、実験参加者に対して同時に実施した異文化理解に関する質問紙の結果との関係から明らかにされた。保守的な考えが強いと、さまざまな判断において自国を優先することが考えられるため、自国に対して脅威となる外国に対しては、特に否定的イメージを持つことが考えられる。本研究から、北朝鮮という日本にとって脅威と捉えられると考えられる国のイメージの改善が、保守的な考えを持つ人において見られたことから、保守的な考えを持つ人の外国に対するネガティブなイメージを改善する上では、写真提示が有効な方法であると考えられるであろう。しかし、北朝鮮とイラクにおいて、保守的な考えを持つ人の両国に対するイメージの改善がもたらされる時期に違いが認められたことから、日本にとって脅威となる国とそうでない国との効果の違いのさらなる検証を行い、保守的な考えを持つ人が有する日本にとって脅威となる国に対するネガティブなイメージの改善への写真提示の効果が、北朝鮮以外の国に対してももたらされるのか、脅威とは捉えられない国に対するネガティブなイメージの改善への写真提示の効果がイラク以外の国に対してももたらされるのかを明らかにする必要があると考えられる。

引用文献

Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, Massachusetts: Addison-Wesley.（オルポート , G. W.・原谷達夫他（訳）.（1968）. 偏見の心理. 培風館）.

Bodenhausen, G. V. (1993). Emotions, arousal, and stereotypic judgments: A heuristic model of affect and stereotyping, In Mackie, D. M. & Hamilton, D. L. (Eds.), *Affect, Cognition, and stereotyping: Interactive in group perception*. 13-37, San Diego, California: Academic Press.

Duronto, P. M., Nishida, T., & Nakayama, S. (2005). Uncertainty, anxiety, and avoidance in communication with strangers. *International Journal of Intercultural Relations*, 29, 549-560.

福村裕子・市谷奈緒美・伊藤香織（未発表）. 国のイメージ変化に及ぼす写真の影響. 同志社大学文学部教育学専攻井上智義ゼミ 2002 年度研究論文.

井上正明・小林利宣（1985）. 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 教育心理学研究, 33, 253-260.

上瀬由美子（2002）. ステレオタイプの社会心理学―偏見の解消に向けて―. サイエンス社.

小平朋江・伊藤武彦（2009）. テレビ番組視聴による統合失調症を持つ人に対する偏見低減の効果. 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 589.

小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈（2007）. ビデオ視聴による統合失調症の人への偏見低減のための教育の効果：AMD 尺度による患者談話条件と医師説明条件との効果の違い. 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 353.

倉地暁美（1992）. 対話からの異文化理解. 勁草書房.

倉地暁美（1998）. 多文化共生の教育. 勁草書房.

倉地暁美（2002）. 異文化間トレランス獲得・向上に至る過程（プロセス）とその転機―多文化間教育における大学生の学び―. 異文化間教育, 16, 49-62.

沼田潤（2010）. 日本人大学生の異文化理解に関する質問

紙調査―異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究―．評論・社会科学，91，193-225.
大高庸平・伊藤武彦（2009）．大学生のコミュニティ感覚は精神障害者に対する偏見と関連するか？．日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集，353.
Park, B. & Rothbart, M. (1982). Perception of out- group homogeneity and levels of social categorization: memory for the subordinate attributes of in-group and out-group members, *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 6, 1051-1068.
佐々木陽子（2003）．偏見の低減過程における感情の役割―高校生の偏見学習クラスの分析―．異文化間教育，18，81-94.
曹圭福（2005）．日韓小学生間のチャット交流授業―外国人に対する偏見の変容―．異文化間教育，22，95-109.
Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, P. R., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior, *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
浦光博（2009）．排斥と受容の行動科学―社会と心が作り出す孤立―．サイエンス社.
Zajonc, R. B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure, *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 1-27.

（受稿：2011 年 6 月 21 日　受理：2011 年 8 月 22 日）